

# 松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No.34

2023年2月発行

## ■ 常設展「発掘された海の記憶」2室の展示を一部展示替えしました

2022年度特別展「海をひらく—弥生・古墳時代の海民」は1月15日で閉幕し、1月22日から常設展となっています。今回、2室の展示を古代の鹿島地域全体の暮らしの様子を紹介するものに変更しました。その中で、『出雲国風土記』に記述される「佐太川」と「渡村」について考察しましたので紹介します。

現在、日本海と宍道湖を結ぶ「佐陀川」が鹿島地域を横断しています。この「佐陀川」は江戸時代の松平治郷(不昧)の時代に清原太兵衛によって開削された運河です。

では、『出雲国風土記』には鹿島地域の河川はどのように描かれているのでしょうか  
「佐太川。源は二つあり。〔東の水源は島根郡のいわゆる多久川、是なり。西の水源は秋鹿郡渡村より出づ〕  
二つの水合ひて、南へ流れて佐太水海に入る。…水海は入海(宍道湖)に通ひ…」 また、別の箇所では、  
「北(正しくは西)に流れて大海(日本海)に入る。…源は田の水なり。上の文にいはゆる佐太川の西の源は是の同じき處なり。およそ、渡村の田の水は南と北に別るるなり。」

つまり「佐太川」は源流が「渡村」にあり、日本海に注ぐ流れと宍道湖に注ぐ流れに分岐するというのです。

恵曇神社蔵の「秋鹿郡絵図(1740)」は「佐陀川」が開削される47年前に描かれた絵図です。これには佐太神社北方の宮内から日本海に流れる川と宍道湖に流れる多久川が描かれ、交わることはありません。宮内の谷から出てきた川は今では広岡川と呼ばれますが、今でも分岐が残り、南に向かって古志方面の水田への用水路として健在で、必要以上の水は「佐陀川」へ落とす仕組みになっています。

二つの水合ひて、南に流れて佐太水海に入る。 『出雲国風土記』秋鹿郡条  
凡そ、渡村の田の水は、南と北とに別るるなり。



この広岡川の分岐は、まさに『出雲国風土記』の「渡村の田の水は南と北に分かれる」という記述にぴったりで、『風土記』当時はこのあたりは「渡村」と呼ばれていたのではないのでしょうか。ここには佐太前遺跡という弥生時代から古墳時代にかけて拠点的な大集落があり、海上交通を利用して朝鮮半島をはじめ日本各地と交流したことがわかっています。また、近隣の遺跡から外洋を航海する船の部材も出土しています。日本海から川をさかのぼってきた船は佐太前遺跡辺りで陸地を「船越し」し、佐太水海で宍道湖へ向かっていたのでしょうか。つまり、陸を渡る場所であったのです。「渡村」の「渡り」はこれまで「川を渡る」とされてきましたが、ここでは船が「陸を渡る」場所として考えました。

重要な交通の結節点であるからこそ『出雲国風土記』に村の名前が記されたと考えます。

発行 令和5年2月

松江市立鹿島歴史民俗資料館

〒690-0803 松江市鹿島町名分1355-4

TEL/FAX 0852-82-2797

Email : k-rekimin@mable.ne.jp